

▼
第
一
章

空襲を生き延び、
畑仕事に耐える
そんな子供時代が
楽しかった理由

私は一九四〇（昭和十五）年四月二十六日、今も暮らしている名古屋市の長良町で生まれた。名古屋駅から南西に三キロメートルほどしか離れていない場所で、現在は住宅密集地になっているが、そのころはまだ閑静な農業地域で、田圃や畑が広がる中にポツポツと人家が見えたくらいだ。

あとから知ったことだが、生まれたときには逆子だったそうで、そのせいか、足と腰の発育が遅れていた。このため、出産直後だというのに母の鶴子は、赤ん坊だった私を抱えて名古屋市民病院に通う羽目になる。幸いにも当時の最先端医療を受けられたおかげで、ある程度は回復した。ただ、それでも完全とはいかず、若干の障害が残ってしまった。

そんなこともあり、駆けっこではいつもビリ。他の競技も得意ではなかったため、小中学校時代の運動会にはいい思い出が一つもない。

成長するにつれ、日常生活を送るには問題がない状態にはなったものの、それでも症状は残った。今も右脚は普通の人より高く上がらないので、ズボンを穿くときにはいつも苦勞する。また、エアコンなどで冷えるとジーンと痺れてくることがあり、いつも気をつけなければならぬ。



名古屋市中心部の地図

左脚の方も、長く椅子に腰掛けていると痛くなることがあり、そのせいでデスクワークを続けるのは苦痛だ。もつとも、そんなときには小一時間ほど歩くと治るので、机を離れて事務所や工場の中をうろつきに行く。そうすることで、社員たちと話す機会は増えるから、これはこれでいいことなのかもしれない。

不思議なのは、こんな体質なのに、正座はまったく苦にならないことだ。むしろ、楽に感じるほどで、何時間でも平気で座っていられる。しかも、なるべく薄い座布団の方がいいから、要するにそういう身体になったということだろう。ちなみに、立ち仕事は問題なく続けられ、デスクワークばかりしているよりも、現場で声を出している方が性に合っているようだ。

そう言えば十歳になったころ、私は父の寿太郎に、自分の名前について尋ねたことがある。すると返ってきたのは、「お前は生まれたときに死にそうだったから、無事、**みる**ように實と名づけたのだ」と言われた。

それほどまでに心配された赤ん坊が、こうして七十八歳になった今でも元気に暮らし、工場の中を歩き回ったり、若い人に大声で指示を出したりしているのだから、こんなあり

がたいことはない。それどころか、頭も身体もしっかりしているのは、神様が「あなたは生涯働き続けなさい」と告げているのと同じだと思い、命ある限り、これからも仕事を続けていくつもりである。

◆五歳で迎えた「日本のいちばん長い日」

「今日は朝から変だなあ……」

目が覚めた途端、いつもと違う周囲の様子に戸惑いを感じたのは、一九四五（昭和二十）年八月十五日のことだ。そう、長かった戦争が終わった日である。

前日までは、上空を飛ぶ爆撃機のエンジン音や空襲警報のサイレン音、そして近くに落ちた爆弾の激しい破裂音などがして、連日騒がしかったのに、この日は何の音もしなかった。不思議に思っ窓を開けると、空は雲一つなく澄み、一面の青色が眩しいほどだった。それまで私が目にしてきた名古屋の空は、集団で押し寄せる敵機による飛行機雲が何筋も走り、陸地近くは空襲による煙や埃に満ちていた。つまり、暗く、どんよりとした印象しかなかったのである。

ところが、この日は不快な音もなく、光を遮る煙もない。それどころか、家の中に大人たちの姿もなく、それがまた静寂に輪をかけた。ただ、その静けさは不安につながるものではない。私は何か清々しい気分のまま、幸せな夏の日を感じたことを記憶している。

もちろん、当時、五歳だった私は、その変化がなぜ起きたのか、まったくわからない。終戦の日と知ったのは後のことだ。ちなみに、家の大人たちがいなかったのは、玉音放送を聞くために外出していたからだろう。

空襲がなくなったことで、家の周囲でも安心して農作業に取り組めるようになった。私も祖父の竹次郎と一緒に、朝早くから夕方まで畑と田圃の草取りを続ける。今だったら幼児虐待に近いが、そのころはどこの農家でも同じようなものだった。

そんな状況でも、子供は子供なりに楽しみを見つかるものだ。田圃や畦道の草刈りをしているとき、水中にアメリカザリガニを発見すると、素早く捕まえて布袋に入れた。そして、いっぱいになると祖母のはるに渡し、茹でてもらう。肉や魚が不足していた時代だけに、おいしく、身体中に栄養が満ちるような気がした。

バッタもよく採っている。祖母が布袋に竹の筒を縛ってくれ、腰につけて広げられるよ